



私の本棚① 『成瀬は信じた道をいく』 ～成瀬と広瀬は似ているけれど～



子どもの権利擁護委員 関谷 道夫



「うちの塾に、“成瀬”と呼ばれる女生徒がいる。」という旧友の話から、今回のスタッフコラムは始まります。宮島未奈著『成瀬は天下をとりに行く』『成瀬は信じた道をいく』の“成瀬あかり”です。この夏、横浜駅西口で懇談して、別れ際、地下街の有隣堂でプレゼントされたのが、成瀬が主人公の二冊でした。有隣堂のカバーに懐かしい思い出が蘇りました。

この友は、他大学の工学部を退学し、「教師になる」という明確な目的を持って、心理学科に入学してきました。年齢も少し上で、幅広い人生経験から、同期と比べると、包容力のある独特な雰囲気のある人でした。安易に「秩序や調和」を求めないところがあります。皆が予想したとおり、教職に就いたものの「公教育」には馴染まず、地元茅ヶ崎で、多彩な子を集めて、ダイバーシティそのままの小さな塾を始めました。その塾は、今でも続いています。

塾生は、塾のない日でも、勝手に教室に集まって勉強しているのだといいます。ラインを繋ぐと、先生不在の塾で、“成瀬と呼ばれる女子”も机を囲んでいました。成瀬と呼ばれる理由は、独特の個性とともに、塾に入って成績が驚異的に伸びたからだといいます。



“成瀬ひかり”は、小さい時から、頭がよく、^{ひょうひょう}飄々として、他人を寄せ付けなため、次第に周囲から孤立していきます。小学校後半になると、女子から明確に無視されるようになります。とてもユニークですが、我が道を^{まいしん}邁進する、頭の良い女の子です。

中2の夏休み、成瀬ひかりは「わたしはこの夏を西武に捧げようと思う」と宣言して、閉店するデパートに、西武のユニフォームを着て、通い続けます。滋賀県大津市を舞台に、微笑ましいエピソードが展開します。

我が道を突き進むことで、周りからは距離を置かれますが、親しく交流した子は、いつの間にか、成瀬の独特な魅力を発見し、引き寄せられていきます。痛快な「成瀬ワールド」が展開します。

コラムを書き始めた日の新聞に、北海道旭川市の中学2年生のいじめ凍死事件の再調査報告が大きく報道されていました。凍死していたのが“広瀬爽彩（さあや）”さんです。妙に、苗字と特性が似ていました。氏名も公表されていますが、「忘れてほしくない」という気持ちがあるのだと思いま

す。

報告で強調されていたのが、自閉スペクトラム症（ASD）（※1）の特性に起因するクラス内での孤立、それに伴う危険な先輩への接近、いじめによるフラッシュバックなどの心的外傷後ストレス障害（PTSD）（※2）の発症で、恐怖心や自尊感情の低下などが継続し、「いじめがなければ自殺は起こらなかった」と結論付けています。性的な暴力・侮辱・脅迫によって、威圧的に支配・隷属させるやり方は、もっとも卑劣で悪質です。人格がズタズタにされます。発達障害は、脅威やストレスへの耐性が非常に脆弱であるため、トラウマ体験が「生きにくさ」や「自己破壊行動」などを生みます。

一般的に、自殺の要因は、一対一対応の単純な因果関係ではなく、複合的でそれが連鎖していると考えられますが、旭川市の重大事態については、おおむね妥当な結論だと感じました。自殺未遂事件、心身の不調、不登校、不安と恐怖を訴えるメッセージ、救いを求める SOS サインなど、様々な援助希求行動はほとんど素通りされました。自殺の緊急度・切迫度は極めて高いレベルだったと認識すべきです。加害生徒の度を越えた執拗性・残虐性、学校などで見え隠れする、無意識的に都合よく認知する「アンコンシャス・バイアス」（正常性バイアス・確証バイアス・自己防衛機制など）（※3）、その結果としての不作為や不適切な対応は、その責任を免れ得ないでしょう。

猛暑だったこの夏に出合った二人に共通するのは、“ちょっと変わっている”“不思議な子”という特性です。決定的に違ったのは、周りにいた人達でした。成瀬ひかりは、ストレングス（強み）とリソース（資源）を有効に活用して、次第に理解者・協力者を広げ、独自の成瀬ワールドをつくっていきます。“成瀬と呼ばれる塾生”も、信頼できる仲間・先生との出会い・交流によって、エンパワーメントし、居心地の良い空間&確かな未来を見つけ出しています。仲間や先生との出会いが、“成瀬と呼ばれる子”の人生を大きく変えました。世の中には、こうした「成瀬」が数多くいるように思っています。

旭川市の広瀬爽彩さんは、頼りになる人も居場所もなく、徐々に孤立無援化&無力化し、ネット上で知り合った人に、「ねえ きめた 今日死のうと思う 今まで怖くてさ 何もできなかった ごめんね 既読付けてくれてありがとう」のメッセージを送っています。結果的に、氷点下 17 度の夜に突然家を飛び出し、翌月に公園で凍死した状態で発見されました。身近な人ではなく、ネット上の人あてに、そして何でもない既読に感謝する最後のメッセージに、痛ましい孤立無援の状況が象徴されています。どんなに自殺念慮が高まった人でも「生きたい気持ち」と「死にたい気持ち」の間で揺れ動いているものです。この時期に、ASD・PTSD・自殺の特性を理解して、必要な支援をする人が不在だったことが悔やまれます。（「トラウマ・インフォームド・ケア」（※4）の必要性）

個性的な二人の岐路を決めたのは何だったのでしょうか？ いずれにしても、生きることの困難な子には、それを十分に理解した「ソーシャル・サポート」（※5）「心理支援」が必要だと考えています。

遠い昔、茅ヶ崎海岸から湘南の海を眺めていました。夏が終わろうとしていました。烏帽子岩に波が立ち、遠くに江の島が霞んでいました。毎年、Chigasaki などのロゴの入った T シャツが送られてきます。今年は「最後の塾生が楽しませてくれます」のメモがありました。幕引きを考える年齢になったのかもしれませんが、信じた道を最後まで歩んだのは、この友のような気がします。

(次回の私の本棚は、『心的外傷と回復』です。)

※1 自閉スペクトラム症 (ASD)

…「コミュニケーションがうまく取れない」「人との関わりが苦手」「こだわりがある」といった特性のある障害

※2 心的外傷後ストレス障害 (PTSD)

…トラウマになる圧倒的な出来事(外傷的出来事)を経験した後に始まる、日常生活に支障をきたす強く不快な反応

※3 アンコンシャス・バイアス…無意識の思い込みや偏見

正常性バイアス…問題があっても「私は大丈夫」と思い込んでしまう心の働き

確証バイアス…自分の考えや経験則を正当化する情報ばかりを探してしまう心の働き

自己防衛機制…自分の中の抑圧された感情や願望を他人が持っていることにして自分を守ろうとする心の働き

※4 トラウマ・インフォームド・ケア

…支援する多くの人たちがトラウマに関する知識や対応を身につけ、普段支援している人たちに「トラウマがあるかもしれない」という観点をもって対応する支援の枠組み

※5 ソーシャル・サポート…社会的関係の中でやりとりされる支援